

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 研究ノート 花嫁のれんの図柄と習俗

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山田, 江津子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001451">https://doi.org/10.57529/00001451</a>

# 研究ノート 花嫁のれんの図柄と習俗

小山田 江津子

## 論文要旨

<sup>はなよめ</sup>花嫁のれんは、絹地または木綿地に「松竹梅に鶴亀」「鴛鴦」「高砂」など優美な図柄が友禅や藍染によって染め込まれた石川県、富山県の地域に見られる花嫁が実家の両親から贈られる嫁入り道具の一つである。

先行研究では、花嫁のれんは、婚礼の際に主に嫁入り先の仏間の入口に飾られ、花嫁は婚家の玄関先で朝一番に汲まれた両家の井戸水を盃に合わせ飲み、仲人がその盃を土間で割る<sup>あ</sup>合わせ水<sup>みず</sup>の儀礼の後に白無垢姿で花嫁のれんを潜り、嫁入り先の両親と共に<sup>ぶつ</sup>仏壇参<sup>だんまい</sup>りが行われることが明らかにされているが、図柄や習俗について比較検討したものはまだみられない。そこで本稿では、先ず現在までの調査で知り得た実態を示し、花嫁のれんの図柄の種類や習俗の特色について把握することを目的とした。

その結果、図柄には鳳凰、宝船、宝尽くし、竜宮の図柄に加え、鳥の図柄が多く描かれていることが窺え、こうした図柄は、<sup>まいわい</sup>万祝や大漁旗にも共通する特色である。花嫁のれんは、婚礼だけでなく、出産や雛節供、成人式、法事、正月、祭礼の際にも飾られており、近年では、祭礼風景を染め込んだ花嫁のれんも見受けられることから、婚礼における<sup>しゅう</sup>祝儀物<sup>ぎもの</sup>の図柄<sup>ずがら</sup>に、祭礼に関するモチーフが加わるなど多様化していることを指摘した。

## 問題の所在

絹地に家紋と美しい吉祥模様が友禅染で優美に描かれた花嫁のれんは、花嫁が実家の両親等から贈られる祝意が込められた嫁入り道具である。

この花嫁のれんの先行研究では、その図柄や習俗について概括的に明らかにしたものはみられるが、図柄の種類や詳細、習俗について考察、検討しているものは少ない。

筆者は今まで、万祝、大漁旗、端午節供の旗の図柄について検討を行ってきた。その結果、これらの図柄や万祝を染める雛型本に民間説話、能や歌舞伎、浮世絵、浄瑠璃、中国の伝説・故事、近世の往来物、近代における小学読本、修身教科書などにそのモチーフが見受けられることを明らかにしてきた。

花嫁のれんに見られる図柄には、花車、生け花、鴛鴦、胡蝶の舞、富士山に鳳凰の隠れ蓑、葉玉等がある。そして、万祝と花嫁のれんの図柄に共通するモチーフとしては、高砂、唐子、鳳凰、鶴亀、松竹梅、竜宮、宝船、宝尽くし、鳥の図柄などが挙げられる。万祝で描かれる鳥の種類は、鶴や鷗、海鳥、鳳凰であり、花嫁のれんに描かれる鳥の種類も鶴や鳳凰、鴛鴦、雉、鷹、雲雀等と豊富である。しかし、花嫁のれんに描かれる鳥は夫婦の姿で描かれることが多くみられる。また、花嫁のれんには贈り主である父親の干支である鶏が描かれている事例もある。

問題点としては、なぜ花嫁のれんに前述のような図柄が描かれるのか、また、こうした図柄がどのような図柄化のプロセスを経ているのかが挙げられる。

花嫁のれんの風習を受け継ぐ者もいるが、婚礼の際に花嫁のれんを仕立てることや花嫁のれんの風習を知る古老も少なくなりつつある。そこで、本稿では、先ず、花嫁のれんの図柄の種類を把握し、データを集積するとともに、聞き書きによって得られた、花嫁のれんの習俗について記していくことにする。

## 1. 花嫁のれんの図柄

嫁のれんの風習は、石川県や富山県の北陸地方に見られる特色で、古くは木綿地に藍染のものも見られたという。現在でも金沢市内の結婚式場の案内では、花嫁のれんが飾られ、その風習が解説パネルと画像で紹介されている。

また、七尾市一本杉通りでは「花嫁のれん展」が13回目を迎え、平成28年（2016）に開館した七尾市観光交流センター「花嫁のれん館」においては「花嫁のれんと鳳凰」の展示が行われた<sup>(1)</sup>。このように、展示を通して、その風習を広く周知させると同時に観光に活用する働きかけもみられる。

先ず、これまでの先行研究を押さえておきたい。花嫁のれんについて『日本民具辞典』では、「暖簾のように嫁が婚家の家風になびくとの心意気をあらわしたもので、図柄は梅に鴛鴦〈おしどり〉、尉〈じょう〉と姥〈うば〉などめでたいものが多い」と記されている<sup>(2)</sup>。

花嫁のれんはいつ発生したか分かっておらず、花岡慎一氏は、「暖簾」について14種類に分類し、その発生について『源氏物語絵巻』の御帳台等が原点で、『山王霊験記』等に短い暖簾が見られ、『運歩色葉集』等に「暖簾」の字が見られることから、鎌倉時代から室町時代にはその風習が商家や庶民に浸透していたと考えられ、その呼称は「のうれん」「とばり」「たれぬの」であったと述べている<sup>(3)</sup>。

また、「加賀のれん」「花嫁のれん」の呼称については、花岡氏が昭和45年（1970）の『暮らしの手帖』第8号で氏が蒐集したのれんについて掲載する際に、室生犀星の研究者でもある故新保千代子氏と相談の上、「外のれん」「内のれん」を総称して「加賀のれん」と名を付けたことや地元では「内のれん」「部屋のれん」と呼ばれていた2種類の「のれん」のうち、婚礼用の「内のれん」を「花嫁のれん」と称することにしたことが記されている<sup>(4)</sup>。

富山県砺波郷土資料館で昭和63年（1988）に行われた「砺波地方の嫁のれん展」の資料を調査した安カ川恵子氏は、嫁のれんや重掛け、重風呂敷は幕末か明治初期に上層階級に始まり、明治後期から一般に普及したのではないだろうか、と結論付けている<sup>(5)</sup>。

氷見市立博物館では平成4年（1992）に「氷見の嫁のれん展」が開催されたが、その図録には主に氷見地方の嫁のれんの図柄について大正期以降に友禅染で鳳凰、松竹梅、鶴亀、鴛鴦、陣幕、楼閣山水、宝船、薬玉、檜扇などの吉祥模様が染められていることや嫁のれんの変遷、重風呂敷、重掛け、重座布団の使用方法、結納から初子の誕生等の習俗について記されている<sup>(6)</sup>。

また、東條さやか氏は、金沢くらしの博物館で平成7年（1995）に行われた「花嫁のれん展」の明治から平成までののれん33点他、婚礼に関する資料の調査や分析を行っている<sup>(7)</sup>。

本稿では、婚礼用の「内のれん」「加賀のれん」「嫁のれん」を総称して以降「花嫁のれん」と呼称することとする。

筆者が現在までに調査した婚礼関係資料は401点で、その内、花嫁のれんは133点である。内訳は次のとおりである。資料の数え方は主に「点」で統一した。

個人宅で資料の計測、撮影、聞き取り検分をした婚礼関係資料は、花嫁のれん14点、留袖を自身でのれんに仕立て直したもの1点（以降「留袖のれん」と呼称する）、重2点（近所、親戚に生菓子を配るための重箱）、重座布団5点、重掛け3点（内4半分に仕立てた袱紗1点）、重風呂敷20点（外包み絹地8点、木綿地3点、中包み9点）、油単1点、鏡台掛け2点、鏡台1点、衣桁1点、箆笥2点、昭和55年（1980）の婚礼関係写真145点、結納の水引細工の羽子板3点、結納の高砂人形1点、婚礼祝いの贈り物の日本人形等5点（「加茂川」「潮汲み」「鶴の夫婦毬」等）飾り太鼓1点、奉燈模型1点、結納の水引細工関連の写真19点、結納の水引細工4点（藁の注連縄が土台の宝船2点、松枝1点、扇に松・梅1点）貸酒樽11点（内1点紅白金色の紙飾り、松に鶴の水引細工付き）松花の藁の土台1点で合計243点である。ただし鏡台から松花の土台までの資料については、撮影、聞き取りのみの調査である。

次に平成28年度（2016）七尾市一本杉通り「花嫁のれん展」（以降、「花嫁のれん展」と称する）開催中に撮影した花嫁のれんが119点（内、年代不明20点）、友禅作家製作の無家紋ののれん2点、留袖のれん3点、重風呂敷10点（外包み3点、中包み7点）重座布団5点、重掛け3点（内4半分に仕立てた袱紗2点）、打掛3点、振袖4点、昭和7年（1932）の3組杯1式、昭和14年（1939）の銚子2点、鏡台1点、鏡台掛け1点、結納飾り1式、合計158点である。これらについては写真撮影と若干の聞き取りのみの調査である。また、家紋、時代、経緯、所蔵について簡略に書かれた同展紹介パネルも参考にした。撮影に関しては、基本的に展示主催者に許可を取り撮影をした。その他にも子供の祝い着物をのれんに仕立て直したものが2点あった。この2点は婚礼関係資料点数には含めていない。

図柄の調査の方法は、初めに「花嫁のれん展」開催中に撮影した花嫁のれん89点（時代不明な20点を除く）を製作時代ごとに分類し、特徴を浮き彫りにした。製作時代というのは、これが結婚式時に作られるので結婚年による判断である。次に「花嫁のれん展」以外に個人宅で調査した14点についても時代ごとに分類し、前記の資料分析結果と突き合わせながら合計103点について考察した。図柄の呼称は筆者が任意で仮に記した。現段階で集めた資料の中から知り得た実態を示すとともに図柄の把握を試みた。結果を以下に示す。時代ごとの分類は次のとおりである。個人宅での資料は〔 〕内に示した。

明治時代（1868～1912）1点、大正時代（1912～1926）9点、昭和元年から昭和9年（1926～1934）7点、昭和10年代（1935～1944）14点〔1点〕、昭和20年代（1945～1954）15点〔3点〕、昭和30年代（1955～1964）10点〔1点〕、昭和40年代（1965～1974）14点〔2点〕、昭和50年代（1975～1984）20点〔4点〕、昭和60年代（1985～1988）2点、平成時代（1989～現在に至る）21点〔3点〕

これらのうち明治時代の1点は、紫地に家紋の雪紋が染め抜かれ、赤い緒を結んだ飾りが付いたものである。図柄は、穴が中心に空いた太湖石が描かれ、その穴から桐の枝が二本伸びており、その枝には美しい桐の葉が茂り、花が咲き、その真上を尾の長い鳳凰が舞っている図柄である。

大正時代の9点に共通しているのが地色や地の上部に青色や紫色の寒色系が使用されている点である。1点のみ木綿地に鈍色と薄い青色を使用し、松と梅枝の生け花に牡丹の籠盛りの図柄があった。その他の図柄は、植物に鳳凰、松・竹に夫婦鶴、山水・楼閣に3羽鶴、菊と桐の花に鳳凰、松・梅に鴛鴦、桐の花に鳳凰、梅と水辺に夫婦雉、桐の花に胡蝶であった。桐の花に胡蝶の図柄は、蝶と共に箏箏と太鼓、バチが描かれており蝶の羽の下部から花菱の図柄が描かれた白く長い布が揺らめく様子が描かれていることから舞楽の「胡蝶の舞」を題材としていると考えられる。

これら上記の大正時代のうちの、桐の花に鳳凰の図柄の花嫁のれんの家紋の周りには、唐草加賀紋が染め抜かれていた。加賀紋が染め抜かれていたのはこの1点のみである。また、家紋の左右にある飾りは、赤い緒を結んだ飾りが5点と多く、飾り無しが3点、朱色の組紐で梅結びが施された紅白の房が1点であった。昭和初期の花嫁のれんには、紅白の房飾りが付いているものが増えてくることから、紅白の房飾りが唯一付いている時代不明の松・梅に鴛鴦の図柄の花嫁のれんは、昭和初期に近い形式のものだと指摘できるだろう。

次に昭和元年から昭和9年（1926～1934）の間の花嫁のれん7点は、地の色が大正時代と共通の青色や紫色のものが4点あり、他の3点には朱色や薄い朱色である。図柄は、唯一昭和7年（1932）と年代が明確なものの図柄は波に宝船、帆の上に鶴が描かれたものであった。その他の図柄は、松・竹・梅に鴛鴦、松・竹・菊花に夫婦鶴の背景に山と楼閣、牡丹・菊花に夫婦雲雀、松に鶴、竹・梅・薔薇の花に雉、牡丹・菊花・水辺に鴛鴦であった。牡丹・菊花に夫婦雲雀の図柄の資料1点に家紋の周りに花加賀紋が染め込まれていた。家紋左右横の飾りは、上部の地が紫色の資料の内、1点に赤い緒を結んだ飾りがあり、薄い紫色の1点には飾りが無かった。昭和初期の花嫁のれんは、明治・大正時代のものには見られなかった朱色が使われることと、図柄の線が簡潔でめでたさの表現が分かりやすくなっている傾向にあると考えられる。

昭和10年代（1935～1944）の花嫁のれん14点の地の上部の色は、紫色、青色、朱色に加え緑色が見え始めた。家紋の左右の飾り物は、紅白の房が5点、朱の房が1点、赤い緒を結んだ飾りが3点、桃色の緒を結んだ飾りが1点、飾り無しが4点であった。加賀紋については、松・竹・梅の加賀紋1点、花加賀紋4点であった。

図柄は、昭和10年（1935）のものに竹・薔薇の花に鶏、花車、山水・楼閣に鶴、松に鳶と夫婦鶴、松に夫婦鶴3点（内5巾1点、3巾2点、家紋に花加賀紋3点で、同展紹介パネルによると3点とも同じ所有者で、全て所有者の母のもの）がある。竹・薔薇の花に鶏の図柄は、同展示紹介パネルでは、父親の干支である鶏が描かれているという。このことから、図柄には干支の動物の図柄が取り入れられている事例があることも分かった。

昭和中期と紹介、展示されていた資料に若松と梅に夫婦鶴の図柄があるが、昭和10年（1935）の竹・薔薇の花に鶏の図柄と霞の描き方と画風が似通っていることから同じ絵師によって染め込まれたものだと推測することができる。

昭和15年（1940）のものは1点で松・菊花に紅白牛車で、赤い牛車の側面の袖には波が描かれ、前簾の左右からは七宝模様が付いたのれん状の長い布が描かれ、上部の屋形は桐の花柄である。一方、白い牛車の袖から屋形部分にかけては鳳凰が向い合せに2羽描かれ、前簾の左右からは小槌や分銅などの宝尽くし柄が付いたのれん状の長い布が描き込まれている。

昭和16年（1941）の資料は2点あり、1点目は笹の葉綸子地に竹・梅・菊花に夫婦雉が描かれている。2点目の資料は、上部が緑色で、桐綸子地の松・竹・梅・牡丹・菊花に夫婦鶴と寝殿風の建築物が描かれている。寝殿風の建物からは御簾が見え、3巾ののれん状の布が風に吹かれている様子が描かれている。

昭和18年（1943）の資料は2点あり、1点目は通常の花嫁のれんのサイズよりも小さなもので、上部は紫色で図柄は牡丹・菊花と水辺に鴛鴦である。所有者が記した「花嫁のれん展」の紹介パネルによると、戦時中で物が無い時代であったため、両親がお米を持って行き購入し持たせてくれたものであるという。

また、2点目は、上部の地が青色で図柄は竹・梅・牡丹に鴛鴦が染められており、同展の紹介パネルによると、若くして夫を亡くした母親が男子不在の家庭で肩身の狭い思いをしながら用意した花嫁のれんであるという。

昭和10年末（1935）とされていた資料は、上部の地が青色で宝船の図柄であった。

次に図1は金沢市の太田健二氏（昭和24年〔1949〕生れ）が所有する今は亡き母親（大正12年〔1923〕生れ）の花嫁のれんである。嫁いだ年が不明のため、仮に20歳頃に結婚したと仮定すると、昭和18年（1943）であることから昭和10年代（1935～1944）に分類した。図柄は、図2のように若松・竹・梅に牛車が描かれ、大きさは3巾で図3のように家紋の横に赤い緒を結んだ飾りが付いている。画風や大きさが前記の昭和18年（1943）の竹・梅・牡丹に鴛鴦の花嫁のれんに近いことと赤い緒を結んだ飾りは昭和初期から昭和20年代（1945～1954）に出てくることから、この花嫁のれんは昭和20年代（1945～1954）までに使用されたものであると推測できる。

昭和中期は、明治・大正期と比較して加賀紋を染め込む事例が増えてきていることが窺えた。また、朱色のみの房飾りは珍しく、赤い緒を結んだ飾りの名残である可能性も考えられなくもない。図柄については竹・薔薇の花に鶏、花車、山水・楼閣に鶴、松に鳶と夫婦鶴、松に夫婦鶴、松・菊花に紅白牛車、笹の葉綸子地



図1



図2



図3

に竹・梅・菊花に夫婦雉、桐綸子地の松・竹・梅・牡丹・菊花に夫婦鶴と寢殿、牡丹・菊花と水辺に鴛鴦、竹・梅・牡丹に鴛鴦、牛車が染め込まれている。

次に昭和20年（1945）代の資料は15点で、地の色は朱色4点、青色2点、紫色6点、赤紫1点、緑色1点、青緑1点が見られた。

昭和20年（1945）の資料は2点で1点目は竹・梅・牡丹に夫婦鶴、2点目の図4は松・竹・梅・岩上の鷹に川である。図4の花嫁のれんは、七尾市の梅富子氏（大正15年〔1926〕生れ）が昭和20年（1945）に20歳頃で田鶴浜から同市の山王町に嫁入りしたときのもので、綸子地に家紋は鶯であった。図5のように、七尾の山車祭りである青柏祭せいはいくさいの期間中の5月3日に花嫁のれんが梅氏の部屋



図4

の入口に掛けられていた。梅家は山王町町内会事務所を務めており、梅家や祭礼の関係者、七尾市豊年太鼓保存会の演者達が集っていた。また、梅氏の部屋の入り口には普段は冬用の留袖を自分で半間ののれんに仕立てたものを掛け、夏は上布ののれんに掛け替えるという。

昭和22年（1947）頃とされている資料1点は、松・竹・菊花に夫婦鶴で赤い緒の結び飾りが付いていた。同展紹介パネルによると若くして亡くなった母親の花嫁のれんであるという。

昭和24年（1949）の資料は3点で1点目は牡丹に夫婦白色孔雀で房飾り等は見当たらなかった。次に、2点目は同展示紹介パネルでは竜宮とされている図柄で、松・竹・梅に竜宮と鶴7羽が描かれていた。この図柄は、現在集めた資料の中ではどの年代にも見当たらない図柄で、現段階では独自の図柄であると考えられる。3点目は牡丹に孔雀柄で同展示紹介パネルによると、戦後で物の無い時に衣料切符で嫁ぐ娘を思い両親が持たせた花嫁のれんであるという。

昭和25年（1950）とされている資料は1点で松・竹・梅に夫婦鶴であった。昭和26年（1951）の資料は2点あり、1点目は梅・牡丹・水辺に鴛鴦で2点目は松・竹・梅に高砂であった。

昭和27年（1952）の資料は3点で1点目は松に5羽の鶴が描かれており、家紋の周りが菊花加賀紋で染め込まれていた。2点目は桐に2羽の鳳凰が描かれており、同展示紹介パネルによると「戦後復興の為に親御さんたちが娘の幸せを願い、昼夜がむしやりに働き倒して花嫁道具として持たせた」と記されていた。このことから、戦後においても花嫁のれんの風習が絶えることが無かった様子が窺える。3点目の図6は、かほく市七窪（旧宇ノ



図5

気町)の平田慧美子氏(昭和6年〔1931〕生れ)の花嫁のれんで、昭和27年(1952)に氏が育った旧宇ノ気村内で嫁いだときのものであるという。図7のように地は赤紫色で竹・梅・牡丹と水辺に鴛鴦が描かれている。

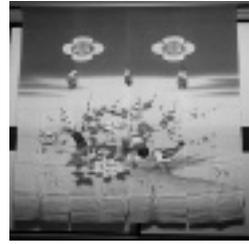


図6

次に昭和20年代(1945~1954)とされている花嫁のれんが1点あり、図柄は小川に牡丹・菫に黒色の鳥が2羽描かれていた。この図柄の構図は他の時代にも見られず、現段階では独自性を持つ図柄であると考えられる。



図7

次に図8は羽咋市の岡山はる美氏(昭和28年〔1953〕生れ)の母の故岡山千代氏(昭和4年〔1929〕生れ)が、鹿島郡鹿島町東馬場(現在は鹿島郡中能登町東馬場)から羽咋市へ嫁入りした時のものである。嫁いだ年が分からず、仮に20歳頃に結婚したと仮定すると、昭和24年(1949)頃で使用されたと考えられる。紅白の房飾りが付き、青みがかった緑色に図9のように竹・梅・牡丹と水辺に鴛鴦が鮮やかに染め込まれている。霞が大胆に左から右に掛けて染められているのも特徴的である。



図8

昭和20年代(1945~1954)の花嫁のれんは、戦後のためか華やかな朱色を用いて鶏や鳳凰、高砂といった、めでたい図柄を表現したものと紫色で色味を押さえながら松に夫婦鶴、牡丹に孔雀、竜宮、赤紫で松・竹・梅に鴛鴦、緑色で松・竹・梅に岩上の鷹に川、青みがかった緑色で松・竹・梅に鴛鴦などといった雅やかな図柄を盛り込んだものが見受けられた。こうした図柄から個性的で独自に描かれたと考えられる構図が増えて来ていることも特徴的であると言えるであろう。花の図柄がより大きく鮮やかに染め込まれており、めでたさを表現する図柄の種類が増えた年代だと推測できる。



図9

昭和30年代(1955~1964)のものは10点、地の色が、朱色が4点、黄色が1点、緑色が1点、青色2点、紫色2点であった。紅白の飾り房は7点、無いのは2点であった。加賀

紋の使用も無かった。

昭和30年（1955）の花嫁のれんは1点で菊に赤い孔雀、昭和35年（1960）のものは1点で松・竹・梅・水辺に鴛鴦・山水に楼閣、昭和36年（1961）のものは2点で1点目は竹・梅・牡丹に孔雀、2点目は緑と赤の松・梅と水辺に鴛鴦であった。

昭和37（1962）年のものは図10の1点で、七尾市石崎町東三区の野崎春男氏（昭和23年〔1948〕生れ）の妻の和恵氏（昭和28年〔1953〕生れ）が昭和50年（1975）に羽咋郡志賀町高浜町から同区に嫁入りした時に用いたものである。この花嫁のれんは、志賀町の氏の叔母（昭和16年生れ〔1941〕）が昭和37年（1962）に嫁入りした際に使用したもので、叔母の勧めによって、道具運びの時に持って来たものであるという。青色で図柄は図11のように松・竹・梅に山に楼閣と夫婦鶴が描かれている。

昭和39年（1964）のものは3点で1点目は松・竹・梅に鴛鴦、2点目は富士に松と鳳凰の隠れ蓑、3点目は牡丹・菊花に鳳凰が描かれていた。また、同展示紹介パネルで昭和30年代（1955～1964）とされていたものは1点で松・竹・梅に鴛鴦である。

次に昭和30年代（1955～1964）後半とされていたものは1点で竹・梅・菊花に夫婦雉であった。

これらの昭和30年代の（1955～1964）図柄からは、鳥や鳳凰、山水に楼閣などの図柄が見受けられた。また、この時代には、赤い緒を結んだ飾りが見られなくなった。また加賀紋の使用も見られなかった。

昭和40年代（1965）のものは15点で、地の色は朱色12点と薄い朱色1点、紫色2点であった。全て紅白の房飾りで、赤い緒を結んだ飾りは見当たらなかった。また、加賀紋の使用も見当たらなかった。

昭和40年（1965～1974）のものは3点で、1点目は梅・竹・牡丹に夫婦孔雀、2点目は松・竹・梅に鴛鴦と水辺で、3点目は松に屋敷と池に赤い橋・背景に山水が描かれている。

昭和42年（1967）のものは1点で松・竹・梅・菊花に孔雀と山に楼閣が描かれている。

昭和43年（1968）は2点で、これらは、金沢市の高畠富子氏（昭和23年〔1948〕生れ）が昭和43年（1968）に金沢市須崎町から同市畝田中に嫁入りしたときのものである。1点目の図12は5巾の大きさで、図13のように竹・梅に夫婦孔雀が描かれている。2点目の図



図10



図11



図12



図13



図14

14も図12と同じ図柄で、大きさが3巾で、夫婦の寝室に掛けられたものである。

昭和44年（1969）の花嫁のれんは4点で、1点目は松・竹・梅に鴛鴦、2点目は牡丹に鳳凰、3点目は松・竹・梅に鴛鴦と山水、4点目は山の上に楼閣・川と夫婦鶴が描かれている。

昭和45年（1970）のものは1点で、展示の紹介パネルには「花鳥風月」と記されており、図柄は霞の中の水辺に夫婦鶴・5羽の鳥と竹・梅・牡丹・椿・菊・菖蒲が描かれていた。

昭和48年（1973）のものは2点で、1点目は竹・梅・牡丹に水仙と水辺に鴛鴦が描かれており、2点目は松・竹・梅に夫婦鶴が描かれている。この2点目と同じ構図が昭和50年（1975）と52年（1977）の2点が見られた。

昭和49年（1974）の花嫁のれんは1点で、図15は金沢市の西春美氏（昭和28年〔1953〕生れ）が昭和49年（1974）の21歳の時に輪島市から金沢市畝田に嫁入りしたときのものである。西氏によると、結納では、嫁入り先から牡丹と鳳凰の図柄の留袖を贈られたので、金沢にある親戚の呉服屋に仕立てを依頼した時に、花嫁のれんの注文も行ったという。柄については呉服店が選び、図柄は、緑色の松と赤色の松が描かれており、年老いるまで夫婦一緒に、ということを表しているようである、とのことであった。図柄は、図16のように緑色と赤色の松・池に赤い橋・屋敷と山に楼閣が描かれていた。

昭和40年代（1965～1974）とされている松・竹・梅・菊花と夫婦鶴に山に楼閣が描かれたものは同展展示紹介パネルによると、早くに両親を亡くしたが、兄が持たせてくれた花嫁のれんであることが記されていた。

こうした図柄から、昭和40年代（1965～1974）の図柄の特徴は、昭和30年代（1955～1964）に引き続き、鳥の図柄が多く用いられていることに加え、山水や山に楼閣が描かれる構図も多く見受けられた。また、赤



図15



図16

い緒を結んだ飾りと加賀紋の使用は見られなかった。松・竹・梅に鶴の図柄に関しては同じ構図のものが見られた。

昭和50年代（1975～1984）の花嫁のれんは21点で、地の色は全て朱色であった。19点に紅白の飾り房が付いており、2点に飾りが付いていなかった。松・竹・梅の加賀紋が1点に染め込まれていた。

昭和50年（1975）のものは4点で、1点目は水辺に松・竹・梅と鴛鴦、2点目は松・竹・梅に夫婦鶴、3点目は松・竹・梅に夫婦鶴と蓑亀、4点目は兼六園の庭園をモチーフにしたことじとうろう徽珍灯籠の風景であった。

昭和51年（1976）の図柄は3点で、1点目は竹・梅・牡丹に夫婦孔雀、2点目は五三ノ桐に鳳凰で友禅作家名が記されていた。次に3点目は松・竹・梅に高砂の背景に山に楼閣が描かれていた。

昭和52年（1977）の図柄は4点で1点目は松・竹・梅に夫婦鶴、2点目は松・池に赤い橋・屋敷と山に楼閣、3点目は竹・梅・菊花に鴛鴦である。

昭和52年（1977）の1点目と昭和50年（1975）の1点目、昭和48年（1973）の2点目の図柄が同じであることが分かった。松・竹・梅に夫婦鶴はほぼ同じ構図であることが窺えた。そして、西氏の昭和49年（1974）の花嫁のれんと昭和52年（1977）の2点目の図柄が同じ構図であることが見受けられた。次に、4点目の図17は金沢市の浦野直子氏（昭和30年〔1955〕生れ）が昭和52年（1977）の22歳の時に鹿島郡鹿島町から旧羽咋郡押水町に嫁入りしたときのものである。図柄は図18のように竹・梅・牡丹・菊模様に孔雀が描かれていた。図19は氏の鏡台掛けで、赤地に鶴の綸子地に孔雀柄の刺繍が施されていた。



図17



図18

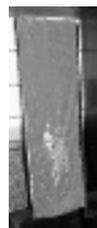


図19

昭和53年（1978）の花嫁のれんは2点で両方とも松・竹に高砂の背景に山に楼閣であった。この2点は、色合いに違いがあるものの、ほぼ同じ構図を成している。

昭和54年（1979）のものは1点で波に宝尽くしを積んだ宝船と背景に山に楼閣が描かれていた。昭和55年（1980）の資料は2点で1点目の図柄は竹・梅・牡丹に夫婦孔雀であった。2点目は、図20で、橘優



図20

子氏（昭和31年〔1956〕生れ）が昭和55年（1980）に野々市市から金沢市無量寺に嫁いだ時のものである。図柄は図21のように竹・梅・牡丹に孔雀であった。

昭和56年（1981）は1点で松・竹・梅に高砂・夫婦鶴と蓑亀であった。

昭和59年（1984）のものは1点で松・竹・菊花に鴛鴦が描かれており、この図柄とほぼ同じ構図が昭和52年（1977）にも描かれていることが窺えた。

図22は昭和50年代（1975～1984）とされているものの2点の内の1点で、これは村井富士恵氏（昭和33年〔1958〕生れ）が旧鹿島郡鹿島町二宮から金沢市無量寺に嫁入りした時のものである。図柄は徽珍灯籠の図柄であった。2点目は梅氏の子息の嫁のもので、松・竹・梅に高砂・山に楼閣が描かれていた。

これらのことから、昭和50年代（1975～1984）も赤い緒で結んだ飾りが見られず、紅白の飾り房が使用されていることが見受けられた。また、個人宅で調査した資料に、孔雀柄が見られ、似たような構図が何点か見られた。鴛鴦や高砂、赤と緑の松・池に赤い橋・屋敷と山に楼閣の図柄に同じ構図が見られる一方、新しい図柄として徽珍灯籠のモチーフが使用されていることが分かった。

昭和60年代（1985～1988）の花嫁のれんは2点で、両方とも地の色は朱色であった。1点目は徽珍灯籠の図柄で、2点目は花車に三人唐子である。唐子柄は昭和20年代（1945～1954）にも製作されていた図柄で、昭和60年代（1985～1988）になり再び取り入れられていることが見受けられた。また、上記のもの1点目だけに紅白の飾り房が付いていた。そして、加賀紋を使用した資料も見られなかった。

平成時代の花嫁のれん22点の特徴は、地の色は朱色が17点と多く、桜色2点、黄色2点、青色1点である。図柄は、竹・梅・菊花・鴛鴦が3点、松・竹・梅に夫婦鶴、花車4点、花籠、松竹に高砂と山に楼閣、松・竹・梅に高砂と夫婦鶴に蓑亀2点、松・竹・梅に高砂と夫婦鶴に夫婦蓑亀が見られた。

平成17年（2005）の図23は石崎町東三区の野崎春男氏の子息の嫁の朋恵氏の花嫁のれんで、図柄



図21



図22



図23



図24



図25



図26

は花車、家紋の周りには松・竹・梅の加賀紋が染め込まれている。

また、友禅作家の名前の記し書きや聞き取りにより、友禅作家が製作したオリジナルの図柄は8点で、松・竹・梅・菊花に化粧道具・文箱・九谷焼の花瓶、朱色地に梅と水辺に鴛鴦、石崎奉燈祭の風景が描かれた図柄の他、展示の紹介パネルの題目より「桜の木の下で」「野の花」「牡丹芳」「欣舞の詩」「鳳凰桜」であった。

図24は平成18年（2006）に西田一也氏（昭和53年〔1978〕生れ）の妻の明子氏（昭和55年〔1980〕生れ）が七尾市大和町から石崎町西一区に嫁入りした時の花嫁のれんである。夫の西田氏によると、二人は氏が石崎奉燈祭で西一区の親方である支部長を務めた平成18年（2006）の秋に婚礼を挙げたという。氏は石崎豊年太鼓「響友会」にも所属しており、八幡神社の春、秋祭り等で演奏している。婚礼の際には会の仲間より飾り太鼓が贈られたという。

明子氏によると、実家が、青柏祭が行われる町にあり、氏も祭礼を好み、奉燈祭がある石崎町に嫁ぐということで、友人が経営する夢華という加賀友禅を扱う呉服店が誂えた花嫁のれんを求め、結婚式の披露宴にも飾ったという。この呉服店では、石崎奉燈祭、七尾市の青柏祭、中島町のお熊甲祭の風景を表した花嫁のれん3枚を製作しており、その内の1枚が氏の花嫁のれんであるという。図25は、図24を拡大した図柄で、中心には西一区の奉燈が5台描かれており、中央の奉燈には「襲銀鱗<sup>おそうぎんりん</sup>」その右隣には「白鷺舞」の文字が描かれ、右端には「観音」の絵柄が描かれていた。

また、左端の奉燈には「銀鱗飛躍」その隣には「恵比寿」の絵柄が染め込まれていた。実際、西一区の奉燈には、図26のとおり巨大な鯛を背負った恵比寿の背景に海と宝船の絵柄が描かれていた。その絵柄の左上には「恵比須尊大漁之図」と墨書きされていた。図27は祭礼の様子である。石崎奉燈祭は、竹田賢廉氏によって、祭礼の始まりと奉燈



図27



図28

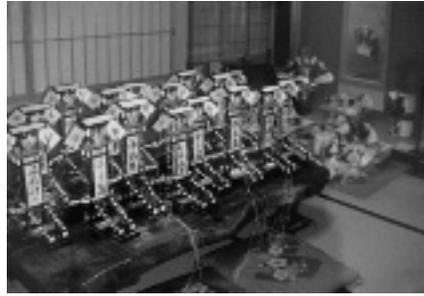


図29



図30

の形成について研究が行われている<sup>(8)</sup>。石崎奉燈祭奉賛会が作成した祭礼の紹介リーフレットには、西一区の奉燈について次のように記されている。

いずれも漁師町らしく、群れをなしていた魚が網にかかり、銀色の鱗をきらきらと輝かせながら、網の中で勢いよく無用に飛び跳ねる様を表しており、大漁を意味している。(中略)現在の観音様の絵は何代目なのか定かではないが、不思議とこの絵を使うと奉燈がよく動き、何年も破れずに使われている<sup>(9)</sup>。

これらのことから、平成時代の花嫁のれんは松・竹・梅に夫婦鶴や松・竹・梅に高砂など従来の古典的な図柄も存在する一方で、友禅作家により描かれたオリジナルな図柄が用いられていることが特色である。

石崎町東三区の野崎春男氏(昭和23年〔1948〕生れ)は、3年前に図28の右側の子供用奉燈に見られる絵柄や字の製作を担当し、「橋の上の牛若丸」を描き上げた。氏は同区の町内会長を務めている。氏が祭礼に参加する東三区の若者と共に武者絵を製作した際には、奉燈の絵の描き方について指導した。氏は、奉燈は夜に明かりを灯すので、絵柄の人物の目玉を紙の裏から筆で蠟を塗ると目が光り、表情が出るという。また、氏は製作工程を写真に記録しており、この作業を行う様子も残されていた。

氏の子息が平成17年(2005)に婚礼を挙げた際には、両家で協力して図29の小さな奉燈模型(披露宴の座席案内看板)を約半年かけて約16台製作した。出来上がった模型は結納品と共に仏間に保管された。模型は、披露宴当日に新郎新婦の席や列席者の円卓の中心に置かれ、終了後には祝儀物として列席者等が持ち帰ったという。模型は、氏が絵と文字を担当し、花嫁の兄は奉燈の基礎を製作し、両家の母親等女性や親族が旗や提灯等の小物部分手作りした。図30は氏が描いた奉燈模型の絵柄の一部で、金太郎や鯉と仙人、浦島が手書きで描き込まれていた。写真記録によると、新郎新婦の席には東三区の「志欲静」の文字が書かれた奉燈模型が飾られていた。

## 2. 聞き書きから見える花嫁のれんの習俗

先ず、関係市町村史等から花嫁のれんの習俗を確認しておく。『日本の民俗 石川』では、「嫁の部屋には持ってきたヨメノーレンを掛け、その後で親子盃や夫婦盃めおとを交すのは町風の新しいことで、(後略)」と示されている<sup>(10)</sup>。志雄町では、嫁が合わせ水を行っている間に嫁が持参した「ノーレン」がナンドに掛けられ、お手引きの女兒共に「ノーレン」を潜り自分の部屋に入り、黒の打掛に着替えて姑と仏壇参りを行うという<sup>(11)</sup>。根上町では、嫁の入室について合わせ水をした後に嫁の一行が茶の間に上り、囲炉裏の横座に座る親戚代表に挨拶し入室後に、仲人が婿方の姑の嫁のれんと嫁ののれんを交換しておき、嫁はお手引きに案内されながら女親代・腰元と共に実家から持参した嫁のれんを潜り、「暖簾を吊らにゃ入れん」「暖簾くぐらにゃその家の嫁さんになれん」と言われていた<sup>(12)</sup>。辰口町では、「ヨメノーレン」は紺木綿から色の羽二重、次に縮緬を用いるようになったという<sup>(13)</sup>。鹿島町では、合わせ水の後にお手引きの子供に手を引かれ、「家紋入りの羽二重・木綿など三幅～五幅もののノーレンを予めかけた部屋に入り、小休する。婿方の当主が灯明をあげ、線香をたくと、テヒキが嫁の手を持ち、両親と共に仏間に入り、婿方の祖先内仏に礼拝、終われば再びノーレンの部屋で小休する」という<sup>(14)</sup>。金沢市では、「嫁暖簾よめのれんはもと三幅物が五幅物となり、紺染めが加賀友禅となった。婚礼の日から七日間座敷の入口に掛けた。鶴亀・宝船等の吉祥模様と嫁の里の家紋が染め抜いてある」という<sup>(15)</sup>。野々市町では、花嫁は合わせ水の儀礼の後、最初に神棚を拜んだ後に白無垢に着替え仏間の入口に掛けられている花嫁のれんを潜り仏壇参りを行う<sup>(16)</sup>。

田鶴浜町では、嫁は合わせ水の儀式の後、持参した「ヨメノーレン」が吊るされた控えの間にお手引きに案内され、休む<sup>(17)</sup>。宇ノ気町（現かほく市宇野気）では、合わせ水の儀式の後に仏壇と神棚のれんに供え物をし、お参りをして「嫁暖簾」を吊るした新夫婦の部屋で仲人、婿、嫁で三々九度の盃事を行うという<sup>(18)</sup>。

志賀町では、嫁風呂式のれんのみの紹介がされていた<sup>(19)</sup>。加賀市山代<sup>(20)</sup>、金丸村<sup>(21)</sup>、加賀市<sup>(22)</sup>、能都町<sup>(23)</sup>では、合わせ水についてのみ触れられていた。

これらのことから、市町村史からは、仏間の入口等に花嫁のれんを掛け、潜ることは、仏壇参りを行う前の所作として非常に重要視されていることが窺えた。

また、合わせ水を行い、所により神棚がお参りされ、白無垢、または黒打掛に着替えた後に花嫁のれんを潜り、舅や姑と一緒に仏壇参りが行われることから、花嫁のれんは入室儀礼に欠かせない嫁入り道具の一つであると考えられる。

花嫁のれんを潜るまでには様々な縁起が担がれ、用いられる品は吉祥模様で装飾されている。例えば、見合いでは、かほく市宇野気で花屋を40年営む女性（昭和8年〔1933〕生

れ)の話によれば、「話が濁る」ことを避けるためお茶ではなく昆布茶または生姜と砂糖を混ぜた飲み物が出されることが、結納の貸酒樽については、同市で結納飾りを生業とする山岸澄子氏(昭和16年〔1941〕生れ)によると、男性が女性へ贈る酒樽には鶴の水引飾りを付け、女性が男性へ返礼として贈る酒樽には亀の水引飾りが付けられるという。

また、石崎町東三区の野崎和恵氏によると、「婚礼当日に掛け鯛を持って行くが、嫁の家では鯛は背中合わせであるが、嫁が嫁入り先に来る時には鯛を腹合わせにして持って行く」という。

金沢市の橘氏が昭和55年(1980)に野々市市から金沢市無量寺に嫁いだ際には、婚礼の約1週間前に「道具運び」が行われたという。図31のように藁の鶴亀を乗せたトラックで嫁入り道具が運ばれ、図32のように衣桁が一番先に嫁入り先に入り、続いて藁の鶴亀と米俵が運ばれ、図33のように仏間等に結納品や嫁入り先へ贈る品々と共に飾られたという。婚礼当日は、図34のように合わせ水の儀礼が玄関先で行われた。

また、近所や親戚に挨拶周りをする際に用いられる重風呂敷の内、絹地の外包みは図35・36で、図37・38は木綿地の外包みで母親が作成した品である。縮緬の中包みは図39・40である。図41は重で、図42のように外包み、中包みの上に重箱を置き、その上に図43のように図44の袱紗を掛ける。図45は鶴、図46は宝船の重掛けで金や銀糸で刺繍がなされていた。資料の図35・42・43・44は西氏、図36・46は高島氏、図37・38・41は浦野氏、図39は村井氏、図40・45は橘氏が所蔵している資料である。



図31



図32



図33



図34

これらのことから、婚礼で用いる品々には細かな所もめでたい図柄で装飾されていることが窺え、装飾することで祝儀性が表現されていることが見受けられた。



図35

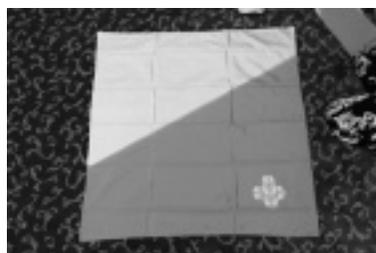


図36



図37

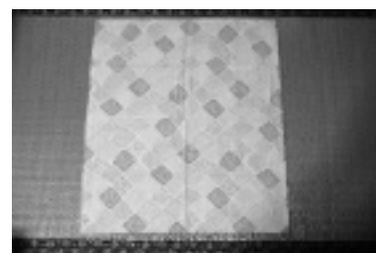


図38



図39



図40



図41



図42



図43

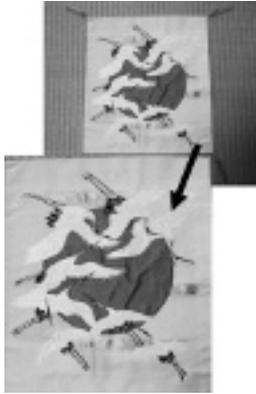


図44

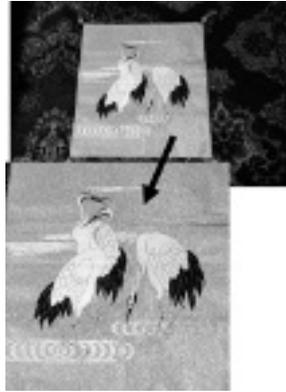


図45

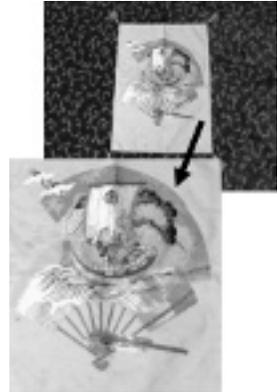


図46

次に花嫁のれんの習俗に関する聞き取りでは、次の通りであった。なお、聞き取りは平成28年（2016）4月から8月までに行ったものである。

かほく市七窪の平田慧美子氏は、合わせ水の儀式的後に花嫁のれんを潜り、仏壇にお参りしたという。また、氏が執筆した自分史『花嫁のれん』には、花嫁のれんは婚礼にはなくてはならないものであった事や格式の高い家は、結婚式やお祭りに部屋に掛けたことが記されている<sup>(24)</sup>。

かほく市宇野気で花屋を40年営む現在83歳の女性は、「嫁のれんを飾るのは、出産や家のめでたい行事の時である」という。

金沢市の西氏は、「白山市の松任の聖興寺しょうこうじの報恩講として一年に一度、西家や旧畝田村の門徒10軒に聖興寺から御住職が仏間に来て法要を行う。西家では、12月5日に法要を行い、仏間の入口に花嫁のれんを飾る。この時に花嫁のれんを飾ることは、主人の母より教わった。また、主人の父や母の命日には、金沢市畝田中の永光寺ようこうじに行く。この時には仏間の入口に花嫁のれんを飾らない。花嫁のれんを飾る時は、その家々で違い、西家では、武三熊神社のお祭り、雛祭り、お正月、娘の成人式等の行事ごとに飾る。武三熊神社のお祭りが今年度は3年に一度の大祭に当たり、秋祭りが10月、春祭りが3月にある。お祭りでは、行列や獅子が出る。町内で獅子を持っており、町内の皆で花代を出し合い、獅子が出る。花嫁のれんは汚れてしまう恐れがあるので気を張った時ではないと出さない」という。

七尾市石崎町の西田明子氏は「花嫁のれんを飾る時は、出産して里戻りする時や毎年祭礼が行われる第一土曜（平成28年〔2016〕は8月6日）の午前中の間に飾る」という。

金沢市の高畠氏は、「現在でも花嫁のれん等の嫁入り道具を飾る。お重掛さんぼうけは、現在でも正月に鏡餅を飾る際に三方の敷物として使用する。花嫁のれんも正月に仏間の奥座敷の前方にある前座敷の入口に飾る。法事にも飾り、25回忌にも前座敷の入口に飾った」とい

う。

石崎町東二区の野崎長和氏の妻の由利子氏（昭和34年〔1959〕生れ）は、「花嫁のれんは嫁入りして一年目の石崎奉燈祭の時だけ飾った」という。

七尾市の梅氏は「花嫁のれんは、子供へと代々伝えていくもので、婚礼道具を子供へ譲っていくことを『お嫁入りの勝負分け』という」と語った。

また、「花嫁のれん展」での聞き取りでは「婚礼の際は、三日三晩お客（酒宴）をし、衣装替えも行った。花嫁のれんは、一枚は仏間に、もう一枚は寝室に掛けた」「中島から七尾へ嫁入りした。花嫁のれんは、お祭りや法事、出産に仏間の入口に掛ける」という話を聞いたことから、その家々で違うが、花嫁のれんは正月、雛節供、成人式、婚礼、出産、祭礼、法事の日には仏間の入口に飾られ、婚礼においては仏間だけではなく、夫婦の寝室にも掛けられていたことが窺えた。

そして、花嫁のれんを潜る前の所作として、花嫁が、嫁入り先の玄関先で「合わせ水」という両家から持ち寄られた井戸水や水道水を飲む儀礼があり、盃を割った後に白無垢に着替え、花嫁のれんを潜り嫁入り先の両親と仏壇参りを行う。聞き取りでは、この合わせ水になる水について人により差異が見られた。実家の水を持参することが認識されている中で朝一番の水を使用する場合と神棚の水を汲んだ後の水を合わせ水として使用するという事例があった。次に記す。

**【事例1】** かほく市宇野気 山岸澄子氏（昭和16年〔1941〕生れ）

嫁入りする女性は、夜にお嫁に来る。嫁入りする女性の家では、朝一番の井戸または水道の水を銚子に汲む。水を汲むのは誰でも良い。嫁入り先の玄関先で、その銚子から素焼きの盃に水を一滴注ぎ、嫁家の水と合わせ花嫁が口を付ける。花嫁が盃を受け取り、水を飲んだ後、仲人に盃が渡され、仲人が玄関先で盃を叩き割る。家の中に入り、仏間の入口に掛けられた花嫁のれんを潜り、夫の両親が仏壇に蠟燭を付けて、嫁が持って来た松花を仏壇に飾る。嫁は夫の両親と一緒に仏壇参りを行う。嫁は事前に仏様に菊入りの松花を持って行く。次の日の朝に子供が御菓子を取りに来るので、あられ等を嫁入り先の人で渡す。

山岸氏は23歳の時に宝達志水町からかほく市宇野気に嫁入りしたという。氏は婚礼・結納品関連の商品の販売や結納品の相談、結納品、貸酒樽の飾り付け、他の地域で作成された水引細工の部品を組み立てて宝船を製作している。宝船の土台作りも氏が行っており、藁で注連縄を作り、その上に水引細工の鶴亀や飾りを飾り付けていくという。氏は「結納品で水引や水引細工で飾るのはけじめだから。けじめって馬鹿にならんげんや」と語った。

**【事例2】** 金沢市 高島富子氏（昭和23年〔1948〕生れ）

朝の6時頃に嫁入り支度をし、打掛を着用した。嫁ぎ先に到着すると見物人の年配の女性が何十人といった。御手引きの子供に手を引かれ、実家から用意した松花という仏壇に供える花を夫になる人の近しい親戚の方に玄関先で「仏壇に供えてください」と言い渡した。合わせ水の水は両家の井戸水を用意し、実家では一番初めの水は神様のために汲み、その次の水を合わせ水の水として汲んだ。合わせ水をカワラケ（盃）に注いだのは母親と夫の姉である。水を1、2回目は飲む形を取り、3回目に口を付けた後にカワラケを私が割った。遠縁の夫婦が仲人をした。婚礼当日は、花嫁の車が嫁ぎ先に到着すると、家の中より謡いが聞こえ、水盃の後、控えの間に案内され、白打掛に着替えた後、花嫁のれんを潜り、仏間へと案内された。夫の両親と共に仏壇参りをした。宴席では、義兄にあたる人が紋付の羽織を裏返して、恵比寿大黒様になり、即興で鯛を釣り上げ、めでたいという出し物（鯛釣り）を行なった。この出し物は、両家の健康と繁栄を願って行われるものである。終宴の頃には、高砂の謡に合わせて大盃が酌み交わされた。

この事例から、一番初めの井戸の水は神様の為めに汲み、その次の水を合わせ水として用いることが見受けられた。また、花嫁が玄関に入る際に嫁入り先の親戚によって高砂の唄や恵比寿大黒の芸能が行われていたことも窺えた。

**【事例3】石崎町東二区 野崎由利子氏（昭和34年〔1959〕生れ）**

金沢市笠舞から石崎町に嫁入りした。母の妹が朝一番の誰も使用していない水道から水を竹筒に入れ、嫁入り先に持参した。夫の家では、夫の父の姉が水を汲んだと思われる。水合わせをした後に夫の父の姉がカワラケを割った。嫁入り先の二階で白無垢に着替えて、仏間がある玄関に入ってすぐ左側に花嫁のれんを掛け、夫の父が仏壇参りした後に夫の父の姉に連れられてお参りした。

こうした事例から嫁入り先に入る前に朝一番に汲んだ水や神棚に供える水の次に汲んだ水を合わせ水として用いられていることが窺えた。また、事例2で朝一番の水は神棚に供えるための神様の水と示されていることから、朝一番の水は神聖な水であると考えられる。

日本の聖水信仰の研究で、小川直之氏は、「若水と節供の水」で正月元旦に汲む若水について、新年の朝に最初に汲んだ水には若返りの力があることを述べており、折口信夫の若水論から聖水が用いられる習俗等を検討し日本の聖水信仰として「末期の水」「産湯と湯灌」「水かけ着物」「重陽節供の着せ綿」「七夕の短冊に願い事を書く墨の水」をあげている<sup>(25)</sup>。

これらのことから「婚礼の合わせ水」を考えてみると、婚礼の入室儀礼に使用される合わせ水も両家の井戸から再生の呪力が宿った聖水を合わせ飲むことで再生し、花嫁はそれ

をご先祖に報告するために白無垢姿で異界とこの世の境界線となす花嫁のれんを潜るのではないかと推測する。「婚礼の合わせ水」は小川氏の示す日本の聖水信仰の一つであると考える。

聞き取りでは、合わせ水を入れる容器は銚子や竹筒を用いており、銚子の口を水引や折った半紙で結んだものの他に、七尾市の綿谷智恵子氏（昭和25年〔1950〕生れ）は、「昭和46年（1971）に七尾市川原町から七尾市湊町に嫁入りした際に行った合わせ水の竹筒には雌蝶、雄蝶の水引が付いた」という。

一方、実家の母の花嫁のれんを潜り、縁側から出て嫁入りし、合わせ水を行っていない事例が次に見られた。

【事例1】かほく市七窪（旧宇ノ気町） 平田香代子氏（昭和33年〔1958〕生れ）

羽咋市内から七窪に嫁入りした。嫁入りする日は、実家の仏壇にお参りし、両親に「ありがとうございます」と感謝を述べた。その仏間の入口に実家の母親が嫁に来た時の花嫁のれんが掛かっているのを潜って仏間を出た。羽咋市では、出棺と同じように縁側から家を出る。玄関ではない出口から出ることは「二度と帰らん」という意味で、草履が縁側の踏み台に用意してあり、そこから家を出て式場に行った。箆筒に着物を入れて嫁入りしたが、花嫁のれんは作成せず、婚礼を挙げる前に嫁入り先で仏壇参りはしなかった。こちらの場合は、嫁入りで実家を出る時も出棺の時も玄関から出る。

この事例の場合、合わせ水はせず、実家の母親の花嫁のれんを潜り、縁側から出ることに重きが置かれている。このことから、羽咋市内のある地域では、嫁入りで実家を出る方法として出棺と同様の形式を取っている事例があることが窺えた。

### 3. 石川県の花嫁のれんの特徴

花嫁のれんの製作年代から分析した図柄の特徴は、明治・大正時代は地の色は青色や紫色が殆どであった。家紋の左右にある赤い緒を結んだ飾りは、大正末期頃から朱色の組紐で上部を梅結びに編んだ紅白の房飾りに変化し始めた。加賀紋の使用は少なく、図柄は鶴や鳳凰が多く用いられており、大正末期から鴛鴦や胡蝶の図柄も見受けられた。

次に昭和元年から昭和9年（1926～1934）には地の色に朱色が見られ、飾りは、紅白の房が多く用いられるようになった。花加賀紋の使用は少なく、図柄は、波に宝船、松・竹・梅に鴛鴦・菊花に夫婦鶴を背景に山と楼閣、牡丹・菊花に夫婦雲雀<sup>ひばり</sup>、松に鶴、竹・梅・薔薇の花に雉、牡丹・菊花水辺に鴛鴦であり、鴛鴦、鶴、雲雀、雉等の鳥の図柄が中心となっ

ている。

昭和10年代（1935～1944）の地の色としては、紫色、青色、朱色に加え緑色が見え始めた。昭和中期は昭和初期と同様な図柄を踏襲しながら、昭和10年（1935）の図柄に、贈り主である父の干支の鶏を染め込んだ例が見受けられた。また、昭和10年（1935）に引き続き、昭和20年代（1945～1954）にも牡丹に夫婦鶏や小川に牡丹・堇に黒色の鳥、牡丹に白色夫婦孔雀、竜宮の図柄などパターン化とは言いにくい独自の図柄が表現されている。

そして、昭和20年代（1945～1954）の色には朱色、青色、紫色、赤紫色、緑色、青緑色があり、戦後で図の種類が増え、図柄の中に鮮やかな色合いが増えてきた。また、明治・大正・昭和20年代（1945～1954）位までの図柄は全体的に日本画風な描き方が成されており、今後注意して調査する必要がある。

昭和30年代（1955～1964）から昭和40年代（1965～1974）も、昭和初期と同様に鳥や鳳凰が多く描かれていることが見受けられ、赤い緒を結んだ飾りや加賀紋の使用も見られなかった。昭和30年代（1955～1964）の地の色は、朱色、黄色、緑色、青色、紫色と色が豊富になった。そして、昭和40年代（1965～1974）の地の色は朱色、薄い朱色、紫色が見られ、図柄は鳥に加え山水や山に楼閣が描かれることが多いことが特徴である。

昭和50年代（1975～1984）は、全て地の色が朱色で、鴛鴦や高砂が見られ、徽珍灯籠の図柄が出始めた。

昭和60年代（1985～1988）の地の色は朱色で、図柄は徽珍灯籠と花車に三人唐子であった。唐子柄は昭和20年代（1945～1954）にも製作されていた図柄で、昭和60年代（1985～1988）になり再び取り入れられていることが見受けられた。また、赤い緒の飾りと加賀紋の使用は無く、紅白の房飾りが用いられていた。

平成時代の地の色の特徴は朱色が多く、桜色、黄色、青色もあった。図柄は、竹・梅・菊花・鴛鴦、松・竹・梅に夫婦鶴、花車、花籠、松竹に高砂と山に楼閣、松・竹・梅に高砂と夫婦鶴に蓑亀、松・竹・梅に高砂と夫婦鶴に夫婦蓑亀があった。過去の図柄からパターン化された図柄ではなく、鳳凰桜や石崎奉燈祭の風景図柄のように個人の好みを重視しつつ、作家が個性的な図柄を製作する動きが見られた。前記のように、婚礼の祝儀物に祭礼のモチーフの図柄が用いられている事例が見受けられるのも平成時代の特徴であると指摘することができる。

また、花嫁のれんの習俗では、婚礼の他、正月、法事、祭礼、出産から帰宅した際や雛節供、成人式など人生の節目に飾られており、その中でも、祭礼については七尾市の青柏祭、石崎町の石崎奉燈祭の際に現在でも花嫁のれんが飾られていた。そして、石崎奉燈祭に関しては、奉燈が運行する通りの家々に飾られているのが見られることや祭礼を好む気

持ちから、その風景を染め込んだ花嫁のれんを所有する事例、新郎新婦の両家によって小さな奉燈模型が作成され、披露宴の座席案内として列席者の円卓に華を添え、祝儀物として列席者に贈られた事例が見られた。花嫁のれんやこれらの奉燈模型には、実際の奉燈と同じ題材の絵柄と文字が描かれており、祭礼と同様な祝意が込められた祝儀物であるといえる。

一方、能登町小木では大漁祈願等の祭礼に、とも旗祭りや袖きりこがあるが、花嫁のれんの習俗は見当たらなかった。また、小木のとも旗祭りの幟旗には、家紋や鶴、縁起を担ぐ文字表現が描き込まれている他、薬玉が付属している旗もある。家紋や鶴を用いる点は花嫁のれんや重掛け、袱紗の他に万祝、大漁旗にも見られる特色である。家紋だけでいえば、五月節供の幟旗や祝い旗にも使用されているという共通点がある。

こうしたことから、花嫁のれんを用いている地域においては、祭礼が花嫁のれんの図柄に少なからず影響を与えていることは事実である。縁起の良い文字を祝儀物に描くことは、万祝や大漁旗のような着物や旗だけでなく、祭礼の奉燈や幟旗にも見受けられる。

花嫁のれんは、単なる祝儀物というだけでなく、実家の両親から嫁入り先へ入家成就の願いが込められた祝儀性と装飾性を持ち合わせたのれんであると言えるであろう。

今後は、集積した花嫁のれんの図柄データを基に、どのような図柄化のプロセスを経て描かれているのかを具体的に分析を試みたい。

## 註

- (1) 2016年 4月30日 北國新聞 26面
- (2) 日本民具学会編 『日本民具辞典』 ぎょうせい 1997年 593頁
- (3) 花岡慎一「特集 加賀の友禅のれん 技法と紋様」(富山弘基編 『月刊染織 a』 2月号 染織と生活社 1988年 18頁)
- (4) 花岡慎一「花嫁のれん考」(鈴木昭伯編 季刊『銀花』 No.141春の号 文化出版局 2005年 3月 116頁)
- (5) 安カ川恵子「砺波地方の嫁のれん」(尾田武雄編 『土蔵』 第2号 砺波郷土資料館 土蔵友の会 1989年 44頁)
- (6) 氷見市立博物館編・発『特別展 氷見の嫁のれん展—のれんの持つ用と美—』 1992年 4～12頁
- (7) 東條さやか「花嫁のれんと袱紗」(金沢都市民俗文化研究所編・発『金沢都市民俗文化研究所 研究報告 平成19年度』 2008年 42～46頁)
- (8) 竹田賢廉「石崎奉燈祭の研究」(國學院大學伝承文化学会編・発 『伝承文化研究』 第4号 2005年

- (9) 石崎奉燈祭奉賛会編・発 「石崎奉燈祭」紹介リーフレット 2016年
- (10) 小倉学 『日本の民俗 石川』 第一法規出版 1974年 211、212頁
- (11) 石川県志雄町史編纂専門委員会 『石川県志雄町史』 石川県志雄町役場 1974年 823頁
- (12) 川良雄編 『根上町史』 根上町公民館 1974年 1051頁
- (13) 辰口町史編纂専門委員会 『辰口町史』 第1巻 自然 民俗 言語編 石川県能美郡辰口町役場  
1983年 515頁
- (14) 鹿島町史編纂専門委員会 『鹿島町史』 通史・民俗編 石川県鹿島郡鹿島町役場 1985年 954頁
- (15) 金沢市史編さん委員会 『金沢市史』 通史編3近代 金沢市 2006年 921頁
- (16) 野々市町史編纂専門委員会 『野々市町史 民俗と暮らしの辞典』 石川県野々市町 2006年 41頁
- (17) 田鶴浜町史編さん委員会 『田鶴浜町史』 石川県鹿島郡田鶴浜町役場 1974年 757頁
- (18) 宇ノ気町史編纂委員会 『宇ノ気町史』 第2号 宇ノ気町役場 1990年 817頁
- (19) 志賀町史編纂委員会 『志賀町史』 資料編第4巻 石川県羽咋郡志賀町役場 1979年 567頁
- (20) 川良雄編 『やましろ』 山代公民館 1958年 372頁
- (21) 若林喜三郎編 『金丸村史』 金丸村史刊行委員会 1959年 336頁
- (22) 加賀市史編纂委員会 『加賀市史』 通史下巻 加賀市役所 1979年 767頁
- (23) 能都町史編集専門委員会 『能都町史』 第一巻資料編 自然・民俗・地誌 石川県能都町役場  
1980年 580頁
- (24) 平田慧美子著、武蔵野文學舎編 『花嫁のれん』 生涯学習研究社 2002年 53頁
- (25) 小川直之「若水と節供の水」(國學院大學伝承文化学会編・発 『伝承文化研究』 第5号 2006年  
7～15頁)

## 【付記】

本稿執筆にあたり、快く資料の閲覧、計測のご協力、ご教示、撮影、掲載のご許可をいただいた金沢市、七尾市、かほく市、羽咋市、能登町小木地区の皆様にご心より御礼申し上げます。

七尾市では梅富子氏、梅氏のご家族、かほく市では、平田慧美子氏、香代子氏、平田氏のご家族、山岸澄子氏にご協力いただいた。また、七尾市石崎町の調査では、石崎公民館を通して石崎奉燈祭奉賛会会長の中西清種氏きよかつにご協力を賜った。中西氏より、石崎町東三区町会長の野崎春夫氏を、石崎公民館長野崎長和氏から西田一也氏をご紹介いただき、ご家族や奉燈祭の参加者にも大変お世話になった。皆様にご深く御礼申し上げます。

また、金沢市の浦野直子氏を通じて、太田健二氏、西春美氏、橘優子氏、村井富士恵氏、岡山はる美氏、野中信嗣氏、重美子氏、高畠富子氏にご協力をいただいた。浦野氏には、資料の計測、ご教示、ご同行を賜った。浦野氏、皆様にご厚く感謝申し上げます。